



統計から社会の実情を読み取る

第121回 ネガティブ感情度による幸福度の各国比較

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



ネガティブ感情度で測った日本人の幸福度は世界6位と低くない

ジェンダーギャップや国際競争力などの世界ランキングと日本の順位が報じられることが多いが、それらは、いくら客観的だと標榜していても、構成要素となる統計データの採用やウエイトづけに作成者の恣意性が疑われるケースが多く、また、同じような他の指標が存在しても日本のランクが低い方ばかりが報じられるという偏りも見過ごすことができない。

幸福度についても同じことが当てはまる。「所得が高ければ幸福なはずだ」、「安全な水を飲めれば幸せなはずだ」、「人間関係が疎でなければ幸せなはずだ」といった上から目線の総合指標として作成される幸福度より、むしろ、単純に「幸せかどうか」を聴いた主観的判断の結果の方が有意義だと私は考えている。

こうした観点から、ずいぶん以前、本連載(2012年1月号)で2005年前後に行われた「世界価値観調査」の幸せかどうかを問う設問を使い、幸福度の国際比較を試みた。

最近、同調査の最新版(2017~2020年調査)が公表されたので、日本人の幸福度のランキングをあらためて調べてみると世界79カ国中36位、OECD(経済協力開発機構)31カ国中21位と順位が比較的低くなっている。日本人は生活の豊かさの割に幸福を感じにくい国民だという点が以前と同じだった。

「OECD 幸福度白書」の最新版(How's Life? 2020)では、旧版と同様、幸福度を構成するさまざまの指標の一つとして主観的幸福度(Subjective Well-being)のデータを掲載している。

同白書によれば、OECDのガイドラインでは主観的幸福度の測定方法として以下の3つを区別している。

- ①生活評価(生活満足度など生活の全体評価)
- ②感情(喜怒哀楽などのこころの状態)
- ③ユーダイモニア(Eudaimonia)(人生の意味や目的、生きがい)

同白書では、①として0~10までの段階別に答えさせた「生活満足度」、②として回答者の感情状態から作成した「ネガティブ感情度」のデータを掲げ、分析を行っている。①では日本や米国のデータは該

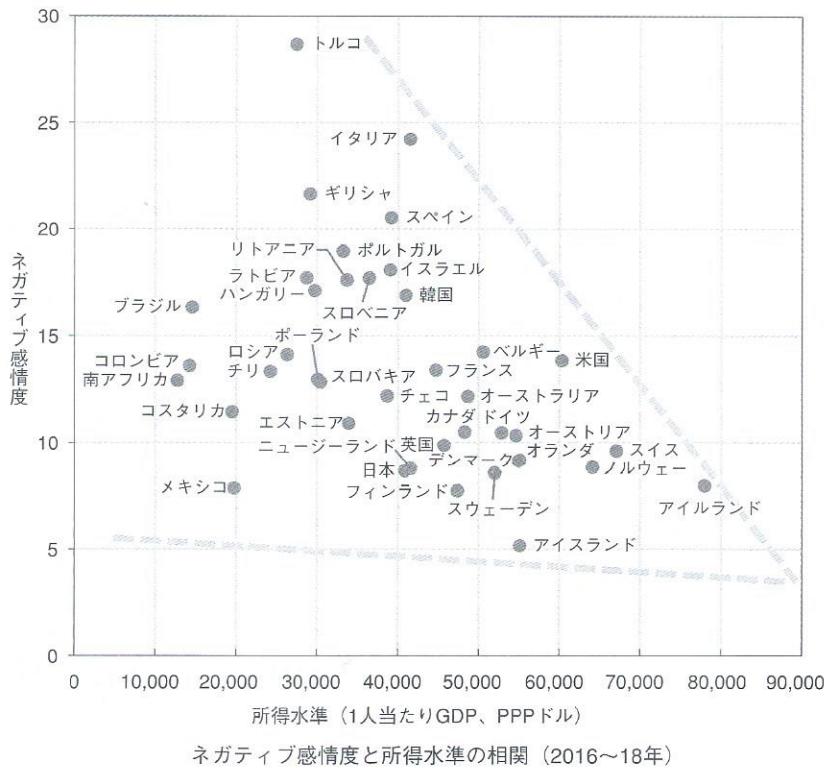


図1 幸福度の各国分布

注) 対象はOECD諸国とその他4カ国。ルクセンブルクは範囲外(ネガティブ感情度10.8、所得水準113,204ドル)。ネガティブ感情度については本文参照。所得水準はWorld Development Indicators(2021.6.18)による。

資料) OECD, How's Life? 2020

当する公式統計がないので除外されている。③は国際比較できる高品質データがないとしてそもそも非掲載である。先述の世界価値観調査の幸福度は、①と③をあわせたような結果と見ることができよう。

前置きが長くなったが、今回は、世界価値観調査ではなく、「OECD 幸福度白書」が掲載しているネガティブ感情度のデータを使って、幸福度の各国比較を試みることにしよう。

ネガティブな感情状態とは、怒り、悲しみ、恐れを経験することをいい、ポジティブな感情状態とは、くつろぎ、喜びを感じ、笑ったり、微笑んだりしていることをいう。「ネガティブ感情度」(Negative affect balance) の指標は、調査日前日の感情状態についてネガティブな回答がポジティブな回答を上回っている割合を指し、ギャラップ世界調査の結果からOECDが算出している。

図1は、OECD諸国とロシア、ブラジル、南ア

フリカ、コスタリカというパートナー諸国、計41カ国について、2016年から18年の各年平均のネガティブ感情度を同時期の所得水準との相関図のかたちで示したものである。ネガティブ感情度が低いほど感情面から見て幸福度は高いと判断できよう。

日本は、幸福度の高い順に、アイスランド、フィンランド、メキシコ、アイルランド、スウェーデンに次ぐOECD37カ国中第6位となっている。

先にふれた世界価値観調査では幸福度がOECD31カ国中21位だった。日本人は、こうした幸せとは何かという反省を含んだ幸福度と比べて、毎日の感情面の幸福度はそう低くないことが分かる。これはある意味で新たな発見ともいえる。

なお、幸福度と所得水準との相関は、私が「片相関」と名づけている分布を示している。すなわち、所得が高い国はほぼ例外なく幸福度が高いが、所得の低い国は必ずしも幸福度が低いと決まったわけで

はないという分布を示している。これは、先述の2012年1月号やその後の世界価値観調査のデータでも確かめられているのと同一のパターンである。

女性・高齢・低学歴ほど幸福感が薄いという世界の通例に反する日本人

ここからは、こうしたネガティブ感情度について、男女、年齢、学歴といった属性別の各国比較を見ていく。原データはこれまでと同じ国ごとに毎年1000サンプル程度で行われているギャラップ調査であり、結果のばらつきを抑えるため、長期間の平均値（2010～18年）で比較されている。

経済環境や文化の違いがあるため主観的幸福度の値を国民間で比較するのはやはり少し無理がある。一方、考え方を共有する同じ国民の間における男女、年齢、学歴といった属性間の比較はむしろ有効性が高いと考えられる。

結論からいうと、世界の通例は、女性・高齢・低学歴の者ほど幸福感が薄いというものだが、日本人は、これに反しているというのが目立った特徴である。

まず、男女差（ジェンダー差）である（図2参照）。

うつ病は女性の方が多いというのが世界の通例であることからも類推できるように、ネガティブ感情度の男女比（男性÷女性）は、

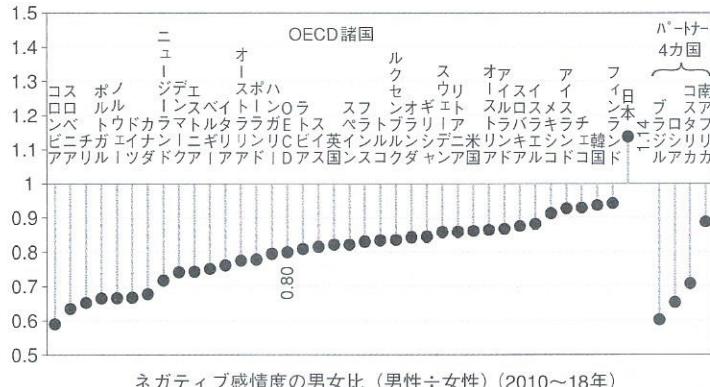


図2 女性の方が否定的な感情に陥りがちだが日本人は例外的に逆
資料) OECD, How's Life? 2020

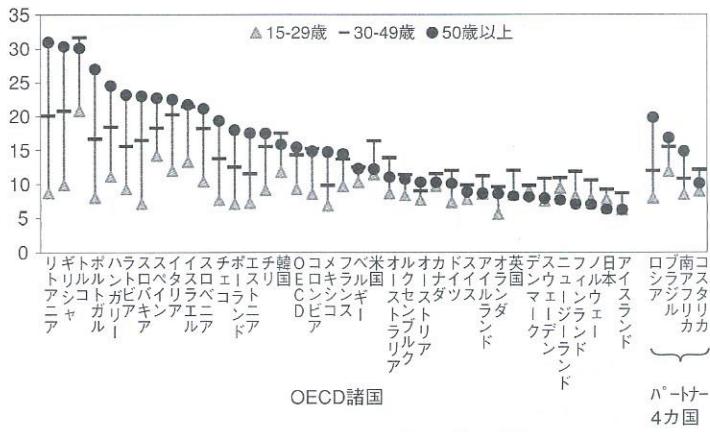


図3 若者は幸せで高齢者は気持ちがネガティブになる場合が多いが日本人は例外
資料) OECD, How's Life? 2020

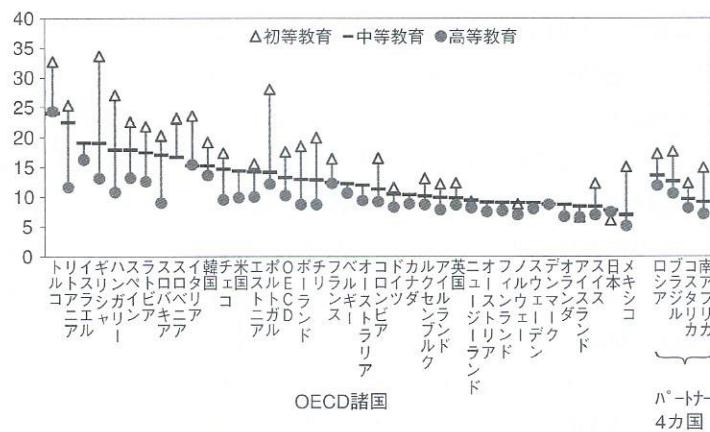


図4 高学歴の者ほど感情がポジティブな国民が多い中で日本人は例外
資料) OECD, How's Life? 2020

日本を除くすべての対象国で、1以下である。すなわち、女性の方がマイナスの感情に陥りがちである。

ジェンダー論者は、男女差別によってこれが引き起こされていると速断しがちである。自殺がうつ病とは逆に男性の方が多いのが世界の通例であることからもうかがえるように、ことは、そんなに単純ではない。

北欧諸国は一般的に男女平等意識が高いが、同じ北欧諸国でも、ノルウェー、デンマークでは、女性の方がネガティブ感情度がかなり高く、フィンランド、アイスランドでは、むしろ、男女比が1に近い。

最も特徴的なのは、日本人だけ男性のネガティブ感情が女性を上回っている点（しかも14%も）である。これは、世界価値観調査などでも日本人の幸福度の女性優位が目立っているのと軌を一にする現象であろう。

世界的に権威があるはずの「OECD 幸福度白書」のこのデータを日本のジェンダー論者が参照することは、まず、ないだろう。しかし、男性が幸福になれなければ女性も幸福になれない以上、ここに盛られている深い真実を直視しない限り、日本における本当の男女平等は実現できないと私は思う。

次に、年齢差についてである（図3参照）。

男女差ほどではないが、世界的には、若者の方が高齢者よりネガティブ感情度が小さいのが通例である。若者には未来があり、死が遠くない高齢者は病苦で苦しむ者も多いからである。

年齢差が大きい国はといえば、途上国的な性格を残している国である。途上国の高齢者は生活していくだけでも大変なのである。所得水準の高い国では年齢差は目立たなくなる。社会保障が充実して、高齢者でも生活苦や病苦で悩むことが少なくなるからである。

こういう見方でグラフを眺めると、若者だけで比較した場合、各国のネガティブ感情度は、国による違いが小さいことに気がつく。どんなに生活が苦し

くても若者には未来があるのである。一方、高齢者のネガティブ感情度の差は大きく、高所得国ほど低くなっていることが分かる。

そして、働き盛りの年齢では、ネガティブ感情度は若者と高齢者の中間である場合が多い。

しかし、米国より右に位置する国では、おおむね、若者や高齢者の両方より働き盛り年齢のネガティブ感情度の方が高くなる傾向にある。これは、社会保障の発達した国でも、仕事や子育て、介護などに伴う働き盛りの年齢の悩みは消えない（あるいはむしろ大きくなる）からだと考えられる。

さて、日本の位置であるが、高齢者のネガティブ感情度が最も低い方から2番目である。高齢者のネガティブ感情度は、高福祉社会といわれる北欧諸国が世界で最も低く、それに伴って年齢差も最も低くなっているが、日本もこれに伍しているのである。少なくとも感情の状態からは、日本は高福祉社会の域に十分達しているといえよう。しかも、日本の高齢人口の割合は世界で最も高い点を考慮すれば、よくやっていると評価せざるをえない。

最後に、学歴について見てみよう（図4参照）。

日本は、中等教育卒業者のネガティブ感情度が、メキシコに次いで低く、初等教育卒業者の場合は最も低くなっている。そして、こうした状況によって学歴差が最も小さい国の一である。

学歴と身分・職種・所得は密接に関係しており、これを背景に、世界ではネガティブ感情度は低学歴の者ほど高く、高学歴の者ほど低いというのが通例である。ところが、ここでも日本は例外的な特徴をあらわしているのである。

以上のように、幸福度の一側面をなす「感情状態」について、男女差、年齢差、学歴差を見る限り、日本人ほど、良い方向に世界の常識が当てはまらない国民はないのだといえよう。こうしたデータからは、日本は「奇跡の国」と見なされてもおかしくはないのである。